

維新史 回廊だより

第10号
平成20年
(2008年)
11月発行
(年4回発行)

編集 維新史回廊構想推進協議会
発行 山口県環境生活部文化振興課(山口市滝町二一〇八三一九三三二二六二七)

◇はじめに◇

「維新史回廊だより」をご愛読いただきありがとうございます。

下関市立長府博物館では、明治維新百四十年を記念して、十一月十五日(土)から、企画展「長州と薩摩」が開催されます。今回の「維新史回廊だより」は、「長州と薩摩」展との連携企画として、長州藩と薩摩藩が融和・協調して明治維新の実現に向かうまでの段階である、元治元年(一八六四)の「禁門の変」に至る両藩を取り巻く歴史過程を紹介いたします。解説は、下関市立長府博物館の古城春樹主任です。

◇「長州と薩摩」・融和・協調までの過程・◇

○幕末、薩長両藩はどのような方針の下に中央政局へ参入したのですか。

ペリー来航以降、諸藩は、攘夷を抱える江戸・京都の政局に、直接的な参入を企図し、積極的な活動を展開していきます。(写真1)

長州藩では、安政五年(一八五八)に定めた「藩是三大綱」(「朝廷に忠節」・「幕府に信義」・「祖宗には孝道」)に従い、また、孝明天皇の密勅(「戊午南呂初五の密勅」)を受けて、文久元年(一八六一)三月、公武合体の推進と開国を容認する「航海遠略策」を藩是とし、中央政局への参入を図っていきました。

元々長州藩は、「即今攘夷」を主張していたのですが、開国が既成事実



写真1 ペリー艦隊の砲丸〔下関市立長府博物館蔵〕

となった今、ただ闇雲に「攘夷」を叫ぶよりも、朝幕融和のもと君臣秩序を明確にして国内一和を図り、進んで海外に進出して皇威を世界に示そうと方針を転換したのです。

長州藩士の長井雅楽が提唱した同策は、公武周旋と外交問題を同時に解決する現実的なもので、朝廷も幕府も非常に興味を示しました。しかし、長州藩内部では久坂玄瑞らの攘夷派による反対運動が繰り返され、さらに文久二年(一八六二)五月には、孝明天皇が攘夷の意向を示したため事態は変わります。

同策をもって朝幕間を周旋していた長井は失脚し、藩是は「破約攘夷」に一転、以後、長州藩は京都を中心とした強硬な攘夷運動を展開していくこととなったのでした。

一方、薩摩藩も、先年亡くなった藩主島津斉彬の遺志を継いで、文久二年二月に「天朝に忠勤」「事変の際には率兵上京」という藩是を定め、中央政局への参入を進めていきます。

同年四月には、薩摩藩国父の島津久光が千名の兵を従えて上京し、五摂家の筆頭で縁戚関係のある近衛家を通じて「公武合体」「公威伸興」「幕政変革」を柱とした諸提案を朝廷に働きかけ、次いで六月には、勅使大原重徳を奉じて江戸に下り幕府に対して国政全般の改革実施を要求します。(写真2)

その結果、幕府は久光の意見を採用し、また、朝廷も久光に京都守護職就任の内命を下すまでに至りました。

しかし、この間、京都では過激な攘夷論者による

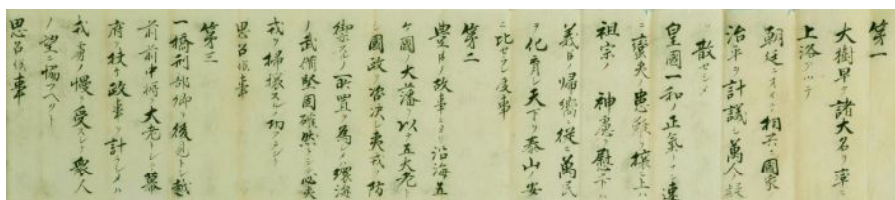


写真2 幕府への勅説三箇条〔玉里島津家蔵・黎明館寄託〕

テロが繰り返され、その圧力により朝廷内では攘夷強硬派の公家の発言権が増大、久光の京都守護職就任の話は立ち消えとなり、また、朝廷権威の強化・確立や、過激な攘夷論者の排除といった、久光が描く改革の実施も、困難な状況となったのでした。

○長州藩と薩摩藩は、なぜ対立するようになったのでしょうか。

文久三年（一八六三）七月、京都の政局は、長州藩の攘夷に協力しなかった小倉藩の処分問題と、天皇が自ら諸侯を率いて攘夷を行う「攘夷親征」を巡って激しく揺れ動いていました。

勿論、攘夷急先鋒の長州藩は、小倉藩への厳罰と「攘夷親征」の実施を望んでいたのですが、長州藩と小倉藩の内乱を危惧し、或いは、朝廷が武家の領域に踏み込む事を望まない在京の諸侯は、この動きを押さえようとします。

しかし、この頃、京都における政治の主導権は攘夷強硬派の公家が握り、彼らと意を通じる長州藩は朝廷さえも動かすほどの力を持っていました。八月四日には、国事参政ら攘夷派の公家の間で議決された小倉藩への厳罰案（藩主小笠原忠幹の官位の剥奪・所領一五万石の没収等）が岡山藩主に内達され、また、八月十三日には、攘夷親征の大和行 幸が布告されるに至りました。天皇の意に従い行ってきた長州藩の運動が、一つずつ実を結んでいったのです。

ところが、孝明天皇自身は、「可忌（いむべき）」公家や「暴烈」の長州藩士や、真木和泉ら「浮浪」の徒によって政治が左右されているこの状況に、危機感を抱いていました。政 は天皇の思いとは別の方向に進んでいたのです。

そこで、薩摩藩は朝廷から攘夷強硬論者を排除すべく、中川宮（久邇宮朝彦親王）や会津藩と謀って政変を企て、いわゆる「八月十八日の政変（堺町御門の変）」を執行したのでした。（写真3）

長州藩以外の在京諸藩に政変の決行が伝えられたのは、当日の朝のこと。京都には長州藩と同様に「破約攘夷」を標榜する藩も在ったのですが、これまで過激な攘夷論を展開してきた長州藩に与するものではありません。在

京諸藩の兵によって御所の各門は閉ざされ、長州藩は、堺町御門の警備を解任されると同時に、京都からの引き払いを命じられるに至ったのでした。

長州藩にとっては、将に青天の霹靂ともいべき事態です。当時在京していた清末藩主毛利元純や岩国の吉川経幹などは、堺町御門傍の鷹司邸に拠って薩摩・会津藩兵と対峙し、事態の打開を図ります。しかし、その後勅使の命に従って退去、洛東の妙法院に入ったものの孤立した長州藩には為す術無く、参内を差し止められた三条実美ら七卿とともに長州へと下っていったのでした。

なお、政変直後の八月二十四日に右大臣二条斉敬らに宛てた孝明天皇の宸翰（天皇直筆の文書）によれば、天皇は「可忌輩取退ケ深々悦入候」と、攘夷強硬論者の排除を喜びながらも、長州藩主父子（毛利敬親、元徳）を「温順之人」とし、長州藩自体を完全に排除することまでは考えていなかったようです。

○その後、両藩の関係はどのようになりましたか。

文久三年十二月二十四日、外国との交易のため、芸州の繰り綿を積んで長崎に向かう途中の薩摩船（幕府から借用の長崎丸）が、下関海峡で長州藩の過激派によって砲撃され、沈没する事件が起きました。（写真4）

先の政変への報復と、攘夷の最中に外国と交易を行う薩摩藩への憤りによるものでしょう。

この事件で長崎丸の搭乗員二十八名が死亡し、その中には薩摩藩が長い



写真3 八月十八日の政変（梨堂公絵巻 第三巻【梨木神社（京都市）蔵】）

歳月をかけて養成した技術者が相当含まれていました。当然ながら、薩摩藩内では長州藩に対する報復の聲が挙がります。

勿論、この砲撃は長州藩府の命によるものではありませんが、その対応によっては一触即発の一大事件です。長州藩府では、薩摩藩から詰問される前に謝罪使を送るか、詰問があつてから薩摩藩の船と気付いたふりをして謝罪するかを選択に悩んでいました。

そこに一石を投じたのが、長府藩十三代藩主の毛利元周もとゆきでした。元周は、攘夷遂行のための諸藩一和の重要性を説き、先に謝罪使を送って朝廷・諸藩に公明正大な長州藩の態度を示すべきであると長州藩主に具申したのです。

この意見は当を得たものでした。卑怯な手を使えば、朝廷の信頼も、諸藩の同情も得られず、京都での復権など果たせないのは明白です。

長州藩府は、この意見を直ぐさま採用し、早速薩摩藩に謝罪使を派遣、長州藩の誠意ある態度に、薩摩藩の島津久光も寛大な処置で応え、この事件は解決を見るに至ったのでした。

しかし、翌元治元年（一八六四）二月十二日、今度は上関で同様の事件が起こります。義勇隊士が、薩摩藩御用商人の船を襲って沈没させ、船長の大谷仲之進を殺害したのです。

事件後、大谷を殺害したとされる義勇隊士の二人が、その首をもって大坂に走り、南御堂みなみみどう（現大阪市中央区）の門前で自決したため、薩摩藩との関係は、表面上事なきを得ましたが、二つの事件は薩摩藩士の長州藩に対する憎悪感を増幅させたことでしよう。



写真4 長崎丸船板〔大蔵院（北九州市）蔵〕

○長州藩は、なぜ「禁門の変」を起こしたのですか。

先の政変後、長州藩は雪冤せつえん（無実を明らかにすること）のための使者を朝廷に送っていたのですが、その使者の入京すら許されず、藩内では次第に武力を以て政権を奪取しようとする京都進発しんぱつの聲が高まりました。これに対し、藩内を固めることを先決とする「割拠論かつきよろん」を唱える高杉晋作たかすぎしんさくは、これを抑えようと奔走しましたが、元治元年六月十四日、長州藩士の吉田稔磨しんまろらが襲撃された「池田屋事件（六月五日）」の報が届くと、その声は完全に封殺されてしまいました。

陸統と東上してくる長州藩兵及び攘夷派浪士たちの動きに対し、同月二十七日孝明天皇は内勅を以て「長州人入京」不可の意向を示しましたが、長州藩に同情する公家も多く、朝議は紛糾、在京の諸大名からも長州藩への寛典かんてん（情けある取扱い）を望む声があがり、長州征討の勅命はなかなか下されませんでした。

当初、この動きを傍観していた薩摩藩でしたが、長州が戦勝すれば、京都は政変以前の状態に逆戻りです。勿論、薩摩藩の立場も危うくなります。

薩摩藩は、土佐藩や福井藩と共に関白や京都守衛総督しゅゐそうとくの一橋慶喜ひつしよのぶらに働きかけ、七月十八日になって漸く長州征討の勅許を得ることに成功したのでした。そして、その翌日、ついに京都での武力衝突（「禁門の変（蛤御門の変）」）が起こります。（写真5）

伏見、山崎、天竜寺（嵯峨）の三方から御所を目指して進んだ長州勢は、伏見から兵を進めた福原越後隊ふくばのえちごが、途中大垣藩兵等に押し返されて一翼を失ったもの



写真5 禁門の変（近世珍話〔京都国立博物館蔵〕）

の、天竜寺から進軍し中立売御門に闘った国司信濃隊、蛤御門にとりついで来た島又兵衛隊の奮戦めざましく、戦いを優位に進めました。

しかし、乾御門から応援に駆けつけた薩摩藩兵の砲撃を受けると、国司隊は堪らず潰走、その後、長州勢は総崩れとなり、京都復権の夢は打ち砕かれたのでした。そればかりではありません。長州藩は御所に向けて発砲したことを理由に「朝敵」の烙印まで押されてしまったのです。

長州藩にしてみれば、またもや薩摩藩に邪魔された思いです。長州藩にとって薩摩藩は、将に不倶戴天の敵となったのでした。

○今回の企画展は、どのようなテーマで開催されるのですか。

以上のように、薩長両藩は、共に朝廷への忠節・忠勤を第一義としながらも、その路線の違いから衝突を繰り返してきました。しかし、その後、僅かの間に両藩は手を組み、倒幕・維新実現の道を共に歩んでいくこととなります。



写真6 長幕海戦図・坂本龍馬筆〔個人蔵・京都国立博物館寄託〕

それでは、何故、そしてどのような過程を経て、両藩は融和し同盟まで結ぶこととなったのでしょうか。この企画展では、両藩の対立、そして融和・共闘の過程と、そこに見え隠れする互いの考え方の違いや思惑を、さまざまな史料を通じて皆さんにお見せします。

下関と、ここに暮らした人々に関係する事件・事象を背景に、長州藩と薩摩藩という二つの視点から幕末史をご覧いただきたいと思えます。(写真6)

■明治維新百四十年記念企画展「長州と薩摩」

・会期 平成二十年十一月十五日(土)から十二月十四日(日)まで

・休館日 月曜日及び祝日の翌日

・観覧料 大人五〇〇(四〇〇)円、大学生三〇〇(二四〇)円

※()内は二十名以上の団体料金

詳しくは、下関市立長府博物館(下関市長府川端一丁目二番五号 電話〇八三二一四五―〇五五五 <http://www.city.shimonoseki.yamaguchi.jp/kyoiku/chohuhak/index.html>)までお問い合わせください。

◇企画展等情報◇

▼萩博物館(萩市大字堀内三五五 電話 〇八三八―二五一六四四七)

明治維新百四十年記念特別展「明治維新と萩」

(平成二十年十一月十五日〜平成二十一年一月七日)

明治維新に活躍する多くの人材を生み出した萩は「明治維新胎動の地」と言われていますが、本企画展では、その主導的役割の背景に埋もれた影の部分にも迫ります。詳しくは、萩博物館ホームページ(<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/hagihaku/index.htm>)をご覧ください。

「あとがき」県内には、明治維新に関連する史料を所蔵し、さまざまな企画展を開催する博物館・資料館がいくつもあります。今回は下関市立長府博物館での企画展「長州と薩摩」についてご紹介しましたが、多くの方々に長府博物館を訪問していただき、生の史料から伝わる歴史の息吹を感じていただきたいと考えています。今後も、県内で開催される企画展情報等をリアルタイムにお伝えしていきたいと思えます。次号は来年三月発行の予定です。

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。県内で開催される明治維新関連の企画展・イベント情報や維新史回廊だよりのバックナンバーは、維新史回廊ホームページ(<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/gyosei/bunka-s/shin/index.html>)へアクセスしてください。皆さんの「意見」「感想」もお待ちしております。